

近松秋江私論

——「うつり香」について——

島田昭男

『蘭燈情話』（大5・7、蜻蛉館書店）に収められている「うつり香」（『新小説』大4・6、7 原題「閨怨」）は、「別れたる妻に送る手紙」（『早稲田文学』明43・4（57）のいわば続篇に当たると言えるが、その一部分は雑誌発表の五年前、明治四十三年の八月下旬から十一月月上旬にかけて執筆されたのではないかと、⁽¹⁾と言われている。これは「うつり香」の書き出し部分の叙述及びその内容からも窺えることであり、「別れたる妻に送る手紙」（以下「別れたる妻」と略記）発表当時の作者近松秋江の心境が色濃く残されている。

だが、もちろん「別れたる妻」発表以降、五年の間に秋江の心境に変化の生じなかったわけではなく、事実、家出した内縁の妻大買ますの歳下の男（同居人）との不義の発覚は、秋江をして失意と瞋恚——無惨な状態にいたらしめており、それは「うつり香」とは別に、「執着」（『早稲田文学』大2・4）、「疑惑」（『新小説』大2・4）などに如実かつ執

掘に描述されている。そしてそれは「うつり香」の再執筆に際して少なからぬ影響を与えていたと思われる。

その意味では遡及的・重層的な状況把握と問題追求が可能であったと言えよう。作者秋江が、その点どのように考え処理しているかとしていたのか、「うつり香」論のこれは一つの問題になるうが、以下、それらも含め「うつり香」について考えてみたいと思う。

＊

「うつり香」の主題にかかわる重要場面の中に、主人公雪岡が蠣殻町の女お宮を連れて、友人の柳沢（初出誌・長田）の家を訪ねるところがあるが、正宗白鳥の「動揺」（「中央公論」明43・4）、「流浪の人」（「文芸」昭25・4）6、
原題「近松秋江」にも同様の場面がある。

後年、白鳥は「文学者」のうち「徹底的によく知つてゐると云へるのは、秋江一人であると云つていゝ。」と書いているが、同郷、同窓の友人として白鳥は秋江と深い交際つきあいがあり、しばしば行動を共にしている。秋江が妻の失踪後の明治四十二年十一月、馴染となった蠣殻町の女太田きみ（二十二歳、お宮のモデル）についてもそうであり、「動揺」、「流浪の人」にそれぞれ取り上げられることになる。秋江と同様の場面が作品中に登場しても不思議ではないのである。

まず、そこで白鳥の「動揺」の場合から見ていきたい。

自身をモデルとする主人公の大村は「文芸欄」担当の新聞記者で、自らも小説を書いている。白鳥は当時、読売新聞社に勤め、文芸中心の「読売新聞・日曜付録」の主任であった。「動揺」の中で主人公の口にする「新年用の書き物」とは、明治四十三年一月号の作品に当るわけだが、白鳥も同じく一月号に「浴医の家」（「中央公論」）、「噂」（「早稲田文学」）他二篇を發表している。

その大村の家へ夜、友人の駒口（秋江がモデル）が蠣殻町の女おふじ（お宮と同一人物）を連れて遊びに来る。

明治四十三年の二月二十二日頃である。年月日は「うつり香」とほとんど変らない。他でも白鳥は秋江との関係を描いているが、秋江のそれと時間的なずれは少なく、ほぼ両者は一致している。事実の一つであるが、それが別な解釈、表現となって現れているのである。

白鳥宅の秋江訪問も例外ではない。

「動揺」では、近いうち家を持たせるといふ駒口の話について、大村の前で二人が改めて話し合い、確認したいというのが訪問目的となっている。駒口はおふじに連れられてきたというかたちで、主導権はおふじにある。おふじは駒口の言動を信用しかねており、証人として大村を立ち合わせたかったのである。

大村はおふじと幾度か関係がある。おふじが大村に証人を求めてきたことも、それがあってのことであるが（おふじが両天秤をかけている節が多分にある）、大村は証人たることを断わる。大村はおふじに深入りしようとは考えていない。ただ「駒口の色女」という理由だけで興を覚えたにすぎなかった。大村は他にも記者仲間の馴染の女を待合に呼んだりもしている。しかし自分の物にしようとする気持はない。新聞記者の仕事に冷淡であったように、女に対しても冷淡であった。無聊の日々、「色魔」たることを理想としたいと思いはするが、それを叶える熱心はなかった。白鳥独特の女扱いの投影であり、虚無的、厭世的な人生観に発している。おふじの申し出に応じないのは当然である。

だが、ともかく二人の話はひとまずまとまり、帰って行くことになる。もっとも話はすぐに壊れ、「芝居の予想通りに運ばないのに飽足らなかつた」と大村を慨嘆させるのだが、この後の経緯いきさつは後述する問題の中で検討することにした。次に実名小説の「流浪の人」であるが、ここでは秋江にせがんで近くに住む白鳥宅を訪問した蠣殻町の女おきみ（お宮と同一人物）が、その家が気に入ったとなかなか帰りがらず、白鳥を手古ずらせる話である。すでに白鳥と関係のあるおきみの計算づくの所作である。間借り生活の秋江と、老婢を置き、一家を構えている売り出し中の白鳥とでは所詮勝負に

ならない。おきみが帰りがたがらず泊めてくれとまで言い出すのも無理からぬことである。しかし白鳥は取り合おうとしない。部屋に入ってきた時のおふじの顔を見て嫌悪感に襲われた白鳥は、ことさらに馴々しい態度を見せるおふじに不快の念を覚えずにはいられなかった。おきみの計算は先刻承知であった、と言える。

つまりは秋江に促され、おきみは渋々帰ることになるのだが、話としては男女の争いが直接持ち込まれぬだけ先の「動揺」より問題は少ない。「動揺」から四十年後、すべてを見届けたうえでこの叙述であるが、作者白鳥の状況認識は基本において変っていない。

白鳥のこの二作に対し、秋江の「うつり香」は深刻である。

前の晩、雪岡の家に泊ったお宮が柳沢（白鳥がモデル）が好きになったと口にしたため険悪な状態に陥り、「二人は遠く離れた仇同志」と背中合わせのまま一晚過し、翌朝、朝食をすますと二人はすぐに柳沢の家を訪ねる。お宮からの誘いであったが、この機会に柳沢を前にしてお宮の気持を確かめたいという雪岡の考えも働いてのことである。だが事態は雪岡にとって残酷に展開する。

柳沢の家が初めてのお宮は、辺りを見回し、住み心地の好さを褒め上げるが、雪岡に対してはぞんざいな態度をとり、そのうち雪岡の顔を見て悪態を吐き始める。去年の秋、お宮と知り合って間もない時分に病気を移され、それが一月末頃から顔や頭に小さい腫物ができ、今は人前に顔が出されぬままでにっていたのである。

その顔についてお宮は「あんまり道楽するから」と罵り、かみさんに棄てられたのも道楽し過ぎからであろうと嘲笑、さらにはかみさんは何処かで妾をしているという話じゃないかと言いつつ立てる。

もはやお宮の心変りは疑いようがなく、柳沢との関係は以前より親密になっていると思われる。それは柳沢だけに話した妻の妾話がお宮に漏れていることから分る。

それに柳沢はお宮が悪態を吐いている間中、雪岡の対応振りを薄笑いして眺めているばかりであった。お宮と調子を合せてのことであろうか。加えて数日前、柳沢がお宮の処へ居続けていたことも話に出てきた。

病気を移された挙句、友人に乗り換えられという酷く屈辱的な仕打ちを受けることになった雪岡の怨恨と無念さとは測り知れぬものがある。怒りの昂じた雪岡は二人を蹴倒して帰ろうとするが、お宮に遣ってある手紙のことが気になって思い留まる。最近、柳沢の陰口を一言書いており、それが柳沢の手に渡らぬうちに取り戻す必要があったのである。お宮との縁切りはそれからでも遅くはない。雪岡は怒りを押え、ともかくお宮を連れて帰ることにする。

白鳥の二作とは異なり、主人公雪岡は惨憺たる状態に陥っている。お宮との関係はこの後、破局を迎えることになるのだが、それに相応しい状況設定と人物描写がなされている、と言ってよい。蠟殻町の女お宮の心変りは、先述のごとく「動揺」においても描かれている。即ちおふじを連れて大村の家を辞した駒口は間もなく不隠な色を帯びて戻ってくる。一度まとまった話が帰る途中で反故になったのである。そして夜遅く、駒口との約束が破談になった旨のおふじの手紙が届けられる。芝居の予想通りにいかぬと大村を慨嘆せしめた所以である。

しかし、ここでは駒口の病気の話になっていない。「うつり香」における雪岡のような病気の進み具合であればもちろんのこと、それほどでなくても話題にしようとすればなりうるのだが、一切触れていない。これは「流浪の人」においても同じである。先に紹介した二作の内容上、あえて問題にする必要もなかった（そこには白鳥の配慮が別に考えられもするが）、ということであろうか。或いは秋江の誇張ないし作為——虚構化があつてのことなのか。

「執着」では、「その蠟殻町の女にも際どい処で寝返へられて、背負い投げを食され、その上に私は正しくその地獄女から、またしても酷い病気を貰って、頭の髪が全然脱けてしまつてゐたのだ。」（傍点引用者）とあり、さらに詳しく、「毎朝目が覚めて見ると、枕に当てゝゐる手拭に頭髮がゾツとするやうに黒く脱けて渦のやうに巻き着いてゐる。そし

て手を頭髮に挿入れてズーツとしごと、幾許でも心持の悪くなるほど抜ける。」（傍点原文）と書いている。そして髪
の抜け、裏れた雪岡の顔を眺めながら悪態を吐く女の様子と、傍らで小気味良さそうに笑っている友人の長田（柳沢に当る）
の姿が書き留められている。「うつり香」ではこの部分が拡大され、破局へ向う主要因として強調されることになってい
る。病氣のことを状況に応じて使い分け、それに見合うかたちでの人物描写を試みていると言えよう。

病氣ということ言えば、引用した「執着」の中にも「またしても」とあるように、秋江は過去に別な女から病氣を
移されている。それは「八月の末」（「早稲田文学」明41・11）に登場する「卑しい女」からであろうが、この時は女と
の仲を清算する銭の工面がつかず、一ヶ月ほど自家に入れ、妻も病氣になっている。放埒、身勝手な話であるが、「流浪
の人」の中で白鳥は病氣について触れ、「下級の売淫窟では、悪疾が蔓延してゐて、用心しても注意しても感染するのが
普通であるが、あの頃の一般人はさして警戒する風はなかつた。我々も成るに任せてゐた。病毒に犯されて一生の不幸を
招くことなんかを、さして神経に病んでゐなかつた。」と主人公に語らせている。

そしてこうした類いの女遊びのことは、例えば秋江の「文学百方面——暖日（二）」（「読売新聞」明43・2・15）に、秋
江・白鳥が共に知り合いの「丸子」なる女の噂話として出てきてもいる。他にもこれに似た文章、記事などがあるが省略
する。二人もまたこの時期の文学者に多く見られたいわゆる△耽溺▽の実践者にはかならなかつたのである。

「うつり香」では、主人公雪岡独特のその△耽溺▽がもたらした悲惨な事態を設定することで作品展開を凶ろうとして
いる。

妻失踪後の一人樂しみを求めて雪岡はお宮に出会い、深入りすることになるのだが、その破局への要因として病氣のこ
とを効果的に使っている。病氣を移したうえ、病状露わなその顔を口汚く罵るお宮のいかにも莫連者らしい冷酷さは、雪
岡にとって無惨であるが、しかし無惨であるだけに一人樂しみの破綻を必然として受け止めさせる働きをしている。むろ

んそこでの柳沢の存在も無視できない。破綻への役割を充分に果している。

このような白鳥の底意地の悪さについては、後に広津和郎も書いている。

その中、私は白鳥氏に対して非常な憤りを起さないではゐられない作物に接しました。(略)秋江氏の馴染の女を、白鳥氏が好奇心から呼んで見て、そして秋江氏に鼻をあかさせた事を書いた作です。(略)私はその時は大変白鳥氏に反感を起しました。何のためにさう云ふ残酷な事をむやみにして喜ぶのか、(略)氏の絶望否定の底には、醜悪ならざるものを求むる靈魂の叫びがあるのです。処が「秋江氏の女」の事を書いた作は、すつかりそれを裏切りました。氏はまるで悪魔のやうな意地悪さを持つてゐました。⁽³⁾

広津の言う「作物」とは「動揺」を指してのことであるが、そこに描かれている白鳥の「悪魔のやうな意地悪さ」が、形を変え効果的に「うつり香」では描出されているのである。これは十分に注目されてよいことである。

ところで「うつり香」だけでなく、「別れたる妻」物にも共通するのだが(後の「黒髪」連作(大11・117)を加えてもよい)、主人公の男は甲斐性も、また耐え性もなく、ただ己れの気に入った女には形振りかまわず一途にのめり込んでいく(傍から見れば愚かなまでに自己投入する)人間として、文字通り生活破壊もいとわぬ痴愚を演じて見せている。⁽⁴⁾

谷崎潤一郎の言葉を借りて言えば、しかしそれは世間の「いかなる男の胸にも潜んでゐる」痴情の偽わらぬ具体表現であり、誰とても主人公の「痴愚を嗤ふ資格」を有しないものであった。通常、人々が秘して語らぬ胸の裡や抑制している行動が、いわば穢を外されるかたちで——それはあまりにも無防御的であるがゆえに容易に裏切られ、笑い物にされるものだが、白日のもとに曝されたそれらの言動を、偽善を好む者を別にすれば非難することはできないはずであった。

ただし、ここで注意しなければならぬことは、秋江自身の体験の別決的追求を基とする題材の独自性もさることながら、秋江の表現力であろう。表現の問題を抜きに作品について語れないのは自明である。「うつり香」を例にとれば主人公雪

岡は当然のこと、お宮及び友人の柳沢の描写である。これまで問題にしてきた柳沢訪問の場面にしても、お宮・柳沢の人物描写は、恥辱と怨嗟に激しく揺れ動く雪岡の心情を際立たせる働きをしている。

お宮の売女特有の阿婆擦れ振りと柳沢の冷淡、非情さの的確な描写である。作者秋江の眼は冷静に対象を捉え個々の心情に即した描写を試みている。

そしてこの表現力（形象化）は「黒髪」連作において完成を見せ、同時代の文学者はむろんのこと、後世代の伊藤整・大岡昇平などをも感嘆せしむることになる。⁽⁵⁾理論或いは題材の特異性だけでは小説は決して書けぬのである。「小説の価値は篇中人物の描写如何によりて定まる。作者いかほど高遠の理想を抱きたりとして人物の描写拙^{つたな}ければ唯理論のみとなりて小説にはならず。」とは、永井荷風の言である。⁽⁶⁾

これまで問題にしてきた白鳥の「動揺」には、「うつり香」との相違点が別にもある。それは友人駒口の訪問後の話である。

大村はその翌日、鎌倉に行って四、五日過ぎ、新聞社からの電話の次手におふじに電話をする。

おふじは二日ほどして駒口が訪れ、おふじ宛の手紙をすべて持ち去り二人の関係は終^{しま}いになったことを告げ、もうこの土地に居なくなるので、その前にちょっと訪ねたいと言うが、大村は断わる。大村とすれば駒口から離れてしまった女にもはや何の興味もなかったのである。

つまりその後、おふじとは全く会うことなく縁を切ることになったのであるが、「うつり香」ではお宮との関係は切れ切れない。

お宮の心変わりが明らかになったにもかかわらず、雪岡はお宮と柳沢との関係が気になり、手紙のこともあって二人の

家を順に訪ねる。二度目に柳沢を訪ねた時、柳沢はしばらく鎌倉に行くことになったと言う。

翌日、雪岡は前回約束の手紙を取り戻すため蠣殻町のお宮を訪ねる。前に来た際、お宮は一軒置いた隣りの洋食屋の二階で客を呼んでいたのです、そこを直接訪ねると、階段口に鎌倉へ行ったはずの柳沢の下駄がお宮のものと並んである。柳沢は密かにお宮と会っていたのである。

洋食屋の小僧に頼んでお宮を呼び出した雪岡は、相手が柳沢であることを確かめ、手紙を即刻返すように言う。

置屋に戻り、雪岡はお宮に面罵されながら手紙を引き取る。柳沢に騙された憤りと口惜しさ、兩人への嫉妬に心中焼ける思いであるが、すでに争う気持は失せている。手紙をさえ手にすればよく、雪岡は静かに置屋を出る。

ここでは柳沢が嘘を吐いたことになり、雪岡を蔑ろにする底意地の悪さが改めて強調されている。

白鳥は秋江のこうした筆法について、彼は「私などに対して憤懣があると、面と向つては云はないで、小説のなか、雑文のなかにそれを書いて気晴らしすることがあった。」「これで怨みを晴らしたぞと云つた趣きが見え透いてゐた。」と、「流浪の人」の主人公をして言わしめているが、しかし白鳥の仕打ちから見て秋江のみを責められぬであろう。葛西善蔵・相馬泰三ら「奇蹟」同人の奇妙な友情に似たものが二人の間であり、事情を複雑にしている。

尚、その「流浪の人」では鎌倉行きの話は出てきていない。主人公の白鳥は、翌日、新聞社の帰りに人形町でおきみと会い、秋江への愚痴に始まり、居所をしばらく隠す必要があるので老婢代りに置いてくれないかなどという話になり、白鳥はおきみを囲ってみてもいいような気持になる。

そこへおきみを尋ねて秋江がやってくる。脅威を覚えた白鳥は気付かれぬよう姿を消すことになる。

おきみへの対応振りが「動揺」とは異ってきているが、根底にある冷淡さは変わっていない。「自由の身の享楽」を貫くことにあくまでも主眼があり、その枠内ですべては処理されていく。

「うつり香」で女の面倒をみる話が出てこなかったのは、対象とした時期のずれによる。白鳥がおきみを浅草田原町の知人の家に二階借りして住まわせるようになったのは、三月末であり、「うつり香」より一ヶ月ほど後のことになる。取り上げられなかったのもこのためであろう。

白鳥の「微光」(「中央公論」明43・10)に登場するお国が、この頃のおきみと同一人物であるというのが中村光夫・平野謙などの説であるが、お国の経歴から考え必ずしもそのようには断定できない。何人かの女性の複合像であろうと思われる。これに関しては別に書いたので詳述は避ける。⁽⁷⁾

また、おきみがしきりに蠣殻町を出たがっているのは、秋江が「文壇無駄話」で「此の頃日本橋の、醜業婦の巢窟たる濱町や蠣殻町は、警察から手が入つて、此の三月以降、断然禁止になつたさうであるが」(傍点原文)と書いていることに⁽⁸⁾関係あろう。

この警察の手入れは、三月二十五日付の「萬朝報」が「不見転芸者大恐慌」なる見出しで、法改正により病毒者の入院、治療が強化され、治癒するまで場合によっては外出禁止(拘禁)となると報じた衛生面からの取締りと繋がっているよう。

おきみは身の振り方を真剣に考えざるをえなくなったわけで、秋江よりは経済的に安定している白鳥の心を惹こうとしたのも無理からぬことであつた。

「うつり香」におけるお宮の心変わりも突き詰めて言えば、かかる状況を見越しての身の振り方にはかならなかった。お宮からすれば雪岡は甘い男に映つたに相違ない。

*

論は後先になるが、「うつり香」の前半部にも主題に深くかかわる出来事が書き込まれている。

暮れの十二月十七日、雪岡はおすまの母親と一緒にいた喜久井町の家から小石川の関口駒井町の加藤方の二階に引越を

する。おすまの失踪後も喜久井町に留まっていたのは、何とかして妻の行方を知りたいためであったが、結局徒勞に終り、柳沢の弟（画家の正宗得三郎がモデル）の住んでいた後へ引越すことになったのである。しかし皮肉にもおすまの行方が知れたのは、その朝である。食事の折、おすまの母親から女の兄の一人ある年寄りの所に嫁かたづいている旨、聞かされる。お宮が口にしていた妾話である。これまでの経過や雪岡の気性などから考え、一騒動起るのを恐れて母親は隠していたのであろう。

果して、強い衝撃を受けた雪岡は狂気のようになって家を飛び出し、いつか知り合いから伝通院近くにいると聞いたのを頼りに、その辺りの長屋を懸命に探し廻ることになる。もちろんこれも徒勞に終り、駒井町の二階に独り住むことになるのだが、忿怒と無念さは容易に消えず、それはお宮への気持を再び掻き立てることになる。再びというのは「うつり香」の冒頭部分にあるように、柳沢とお宮との関係を知った雪岡が、一時、心が揺らぎ、迷いを見せていたからである。

おすまが戻ってこぬことが明白になった以上、雪岡にとって頼りになるのはやはり一人、樂しみとして恰好な相手、お宮である。しかも、丁度よいことに柳沢は神楽坂の芸者と馴染となり、お宮との関係は遠のいてきている。

これはおそらく作品展開上の符合的設定と思われるが、お宮もまた雪岡に近づいてくる。

おすまの失踪後の雪岡の様子については、「お前に姿を隠されて意気地なく気が狂ったやうになつて、何事も手に着かないでふらく／＼東京の往来を歩いてゐる」と書かれているが、秋江自身もこれに似たものがあつた。「文学百方面——二三日（一）（三）」では、次のように語っている。⁹

相変らず生欠伸が出て、後頭部から頸筋の方が痛んで何をするのも、うい、が、小使い銭が一銭も無くなつたので、何でも構はず書き付けて、早速かぬ銭にせねばならぬ。（「二三日（一）」傍点原文）

二時三時頃になつて、定きまつたやうに眼が醒めた。醒めると、唯暗たい心細い感がす。（略）

この間中殆ど立て続けに新聞に出た秀才の医学士と工学士の自殺のことが自然に思ひ起された。けれども自分はまだ自殺するといふ気にはなれないと思つた。何か書き物をせねばならぬのだが、心を遊ばすための新聞さへ読むに捲む。(「同・(二)」)

(妻と住んでいた家々を訪ねてみたが、)その頃の記憶は、今の私に想ひ起すだに堪へられぬ。過去よりも現在が満足だといふでもない。追憶は唯悲しい。(「同・(三)」)

足掛け七年連れ添つた妻ますの失踪は、秋江を心身共に萎なえた状態に追い込み、独り鬱々とした暮らしを続けさせることになる。蠣殻町の女おきみと知り合つたのは、こうした状態の中であつた。秋江の書いたものから推して十一月七日頃と思われる。

おきみは男を飽かせぬ肉体的魅力もあつて、掛け替えのない存在となる。秋江は一気におきみにのめり込み憂さを晴らすのだが、白鳥の邪魔が入り、「別れたる妻」に描述されているようにそれも意のままにならぬ事態となる。「うつり香」は、そのおきみ、つまりお宮との至福の時間が瞬時の夢と終り、遣せ瀬なさと悔しさで涙しながら柳沢宅を後にするところから書き起されている。

当然のこと、家に居ても暗く落着かぬ日が続いている。そこへ妻の嫁いだ話を聞かされたのである。雪岡は改めてお宮に近づいていく。先述したようにお宮は柳沢に別の女が出来たこともあり、雪岡と繕よりを戻し家を度々訪れるようになる。十二月二十五、六日頃からである。

白鳥があくまでも他からの隔絶を基とし、単独行を生活信条としている(白鳥固有のニヒリズムの発現にはかならぬ)のに対し、秋江は共同者ないし同行者を求め、その協力によって生きようとしている。つまり他との復合、協力関係によって生活安定を得ようとするのだが、ともすればそれは己れ一人の思い込みであるがゆえ、永続させずに終る。秋江の好

む言葉で言えば情緒的、思念が先行しての人生認識であり、生活設計である。他との協同を成り立たせるに必要な現実的條件はほとんど考慮されることなく、その時々々の両者間に在る気分、感興が優先される。共同者たる相手にとってそれだけで生活は成り立たぬ。妻ますの家出もそれがためである。「別れたる妻」でのおスマの「私の眼の下に此の皺は、貴下あなたが拵へたのだ。私は此の皺だけは恨みがある」という言葉は切実である。おきみの場合も基本的には事情は変わらないのだが、それは後の問題に譲ることにして、お宮と繕よりを戻した雪岡は久し振りに家庭の味を満喫することになる。

置屋の主婦からじかに許しを得た雪岡は、嫁でも迎えるような心持ちで蠣殻町に赴き、帰りはお宮と食事をし俵くもを連ねて家に戻ってくる。翌日は、春のような暖かい陽が射し込む中で朝を迎える。新婚時の気分には浸る雪岡は「世の中の何も斯かも面白いもの」に思われてくる。お宮と差向いの食事も格別で、「まるで御飯が咽喉のどへ飛び込む」ようであった。

雪岡の考えている潤いと感興に富む生活であり、それは妻ますとの満ち足りた暖かな日々（家庭）の回復にはかなならなかった。

ただ気になるのはやはり柳沢のこと——留守を訪ね、老婢にその後のお宮との関係を訊ねてみるが、このところ通っていそうにない。雪岡はすっかりお宮を「自分の物」と決め込み、情人いとせむし気取りでお宮の病氣見舞いなどにも出かけていく、といった生活が、多少の諍いはあるが暮れを挟んで一ヶ月半ほど続くことになる。

一方、秋江について言えば生活は必ずしもそうではなかった。

「此の頃」（「読売新聞」明43・1・1）の「落着け／＼」の節では、「此の頃の私は、種々いろいろな思念おもひに悩みて安やすかなる眠りを得ない。脅迫観念にも襲はれる。此の世を寂しいとも思ふ。人間を果敢はかないとも思ふ。愛に棄てられたとも思ふ。愛を欲しいとも思ふ。」

「食欲も進まない。明日の日の楽たのしみもない。」「安眠できずに忌はしい邪念に捉へられる。」と、むしろ心安らかざる

痛苦、哀しさを訴えている。

また「文学百方面——うき草の悲しみ」（上と下）（「読売新聞」明43・1・23と25）では、「非常に神経が衰弱してゐる」（上）と述べ、「本当に親切にしてくれる者があれば、私はもう心をも身をも投げ掛けて、その人の思ふがまゝに、為るがまゝに為しても好い。」（下）と、真底頼るべき人間のいないことを語っている。おきみとの関係も実際にはそれほどまゝはいいなかつたと思われる。相手は商売女であり、当然錢がかかる。「うつり香」では泊って帰るお宮に五円手渡している。たとい一時にせよ共に暮らすための必須条件であるが、秋江の収入は雪岡同様乏しかった。白鳥の勤め先「読売新聞」を中心に「国民新聞」「文章世界」「新潮」などに評論、随筆などを寄稿しているが、原稿料は知れたものであった。「新潮」の談話原稿料が「一枚二、三十錢」とあるのから推してそれは分ろう。⁽¹¹⁾（「疑惑」には、「評論めいたもの書いて取る錢は、一月に拾円の上を出なかつた。」とある。）白鳥の「落日」（「読売新聞」明42・9・1と11・6）の原稿料「一回分四円」とうてい及ばない。⁽¹²⁾

おきみとの仲がうまくいくはずはなく、長続きは望めなかつた。とすれば帰っていく先は妻ますの処しかない。しかしその妻は五ヶ月近く経っても行方知れずであり、家出の真相も未だに握みきれずにいる。

「文壇無駄話」（「読売新聞」明43・1・30）の中に次のような一節がある。

森鷗外氏訳「統一幕」は、特にストリンドベルヒの「債鬼」を読みみたいものと思つて楽しんでゐた。一体、私は、ストリンドベルヒは好きだ。「父」も面白い。姦通された夫の苦悶ほど深刻なものはないと思ふ。デンマークの作者にこんな作が出る処を見ると、一つは作者の個人性によるであらうが、丁抹では仏蘭西辺よりも、この姦通といふ問題に対する刺激がまだ新しく且つ鋭いと思はれる。社会道德の神経がまだそれほど鈍つてゐない証拠かも知れぬ。

「統一幕」は正しくは「統一幕物」であり、明治四十三年一月に易風社から刊行されている（初出誌は「歌舞伎」明42・

6 (8)。秋江はストリンドベルイを「デンマークの作者」と書いているが、スエーデンの自然主義文学者である。

「父」は上田敏訳の「父親」(「新小説」明40・1)を指す。⁽¹³⁾

戯曲「債鬼」は三場からなり、舞台は湯治場のホテルの一室。登場人物は画工のアドルフ、妻のテクラ、教員のグスタフの三人である。

劇は画工と教員の対話から始まる。

教員は画工の妻となっているテクラの先夫である。しかし夫のアドルフはそのことを知らない。妻に逃げられた(姦通された)男が、何喰わぬ顔をして再婚相手と会う設定(第一場)であるが、続いて両者が相談のうえ、まず教員が隣室に隠れて画工夫婦の話を盗み聴きし(第二場)、次いで夫の画工が隣室で教員と妻との話を盗み聴きする(第三場)という運びになる。

姦通された男が「債鬼」^{ふたり}となって姦通相手を裁き、夫婦の仲を引き裂こうとする。次に姦通した男が嫉妬と猜疑心から「債鬼」^{ふたり}となって先夫を含む男関係を問い詰め、それに姦通された男(先夫)が裏切った女を責め立てるが話が重なる。

姦通された男、した男が直接向い合い、そこに姦婦が加わり、男はそれぞれ「債鬼」^{ふたり}となって相手を難詰、断罪するという筋立てで、男女の愛の相剋と亀裂を追求しているこの戯曲が、秋江に強い刺激を与えたことは確かである。単なる一篇の劇として読み過すにはあまりにも問題が身近で切実すぎたと言える。⁽¹⁴⁾ことにまずに關しては若しやという疑念が以前からあり、「債鬼」に描かれている姦通された男グスタフの恨みと復讐は他人事とは思えなかったであろう。己れが同じ境地に落ち込むのではないかという疑念と怖れは、秋江を不安定な索漠たる日常に追いついて立すにはおかなかつたに違いない。

蠟殻町の女お宮への思い入れの強さはまさにそれに比例している。疑心に包まれ平静ならざる暗鬱な日常からの脱出で

あったのだが、その脱出も瞬時のことであり、お宮との愉悦の日々は無残にも打ち砕かれることになる。女への期待が大きかっただけに裏切られた時の衝撃は人一倍強く、深刻であった。お宮との関係が破局を迎える「うつり香」の柳沢訪問の場面で、白鳥の作とは異なる状況を設定し、お宮及び柳沢を悪者に仕立て上げたのもその意味では必然であった。虚構操作による秋江なりの報復ではなかったか、と思われる。

そして、明治四十三年秋の塩原温泉での「うつり香」執筆時に戻して言えば、行方知れずでいる妻ますへの訴えが重ね合わされていた。当時の心境からすればむしろの方が強かったように思える。女と友人に背かれた男の怨嗟と懊悩を描くことで、ますの翻意——関係修復をひたすら願う気持ちである。「愛執苦惱」⁽¹⁵⁾の一つの打開である。

しかし「うつり香」が発表されずに終わったことで、それも無に帰してしまった。秋江の心定まらぬ鬱屈した生活は、尚しばらく続くことになる。

これは小論とは直接関係ないが、発表当時、話題となった宇野浩二の出世作「蔵の中」(「文章世界」大8・4)の破格的な書き出し部分のことである。「うつり香」のそのの影響を受けてはいないであろうか。

両者の書き出し部分を紹介すると次の通りである。(傍点引用者)

そして、私は質屋に行かうと思ひ立ちました。(宇野)

さうして、それと、もに遣る瀬のない、悔しい、無念の涙がはらはらと溢れて(略)。(秋江)

初出誌では「それから私は、長田の処を出て戻った。」とあったが、この後に続く「戸外そとに出ると、今まで平気を装つて張り詰めてゐた気分が一時弛いっときんで、丁度肋骨をへし撓まげられたやうに屈辱の感が胸に逆さかり上げて来た。」と共に削除されている。⁽¹⁷⁾何れにしても接続詩で始められていることに変わりない。

ただ秋江の場合は、「別れたる妻」の続篇として書かれているので不自然ではないが、宇野の場合はそうではない。秋江文をヒントにあえて破格を狙ったように思える。

「蔵の中」は、よく知られているように着物好きの秋江が、質入れした着物を秋になると質屋の二階で自ら虫干しし、その下で午睡するという逸話を、友人の広津和郎から聞いたのを基にしている。その宇野が秋江の作品に無関心ではなかったはずである。

気付いた事なので、この機会に書き留めておくことにする。

△注▽

- (1) 中島国彦氏は島崎藤村「家」続篇の「国民新聞」連載延期を受け、急拠、同紙に掲載するため栃木・塩原温泉で執筆始めたが、新聞社側の事情により中止せざるをえなくなったのではないかと書いている。（「近松秋江における作品系列の問題」
「国文学研究」昭54・6）
- (2) 「流浪の人」（「文芸」昭25・4～6）
- (3) 「私の好きな白鳥氏」（「文章世界」大6・1）
- (4) 「『黒髪』序文」（近松秋江『黒髪』昭22・7、創元社）
- (5) 伊藤整「近松秋江」（『近代日本文学研究』大正文学作家論（上）『昭18・9、小学館）、大岡昇平「近松秋江『黒髪』」（『詩と小説の間』昭27・7、創元社）
- (6) 「小説作法」（「新小説」大9・4）
- (7) 「近松秋江私論（八）」（「文学年誌」昭63・9）

- (8) 「読売新聞」(明43・3・13)
- (9) 単行本に収録の際、削除されている。
- (10) 「読売新聞」(明42・10・2・3、5)
- (11) 「『新潮』の記事に就て」(「読売新聞」明42・12・12)
- (12) 「新聞小説今昔」(「社会」昭23・3)
- (13) 『森鷗外全集』著作篇第二十二卷(昭27・5、岩波書店)の「椋鳥通信(二)」では、ストリンドベルイの経歴や作品、死の前後の様子などについて述べ、著作篇第二十卷(昭26・10、同)では、「紐」など六篇の戯曲を紹介している。
- (14) 中島国彦氏が「雪の日の幻想」(「文芸と批評」昭43・3)で、秋江の「雪の日」(「趣味」明43・3)との関係について言及している。尚、「動搖」では駒口が「画工の憐れさと、教員の憎さ」を語った、とある。
- (15) 近松秋江「解説」(明治大正文学全集『近松秋江・宇野浩二集』昭4・10、春陽堂)
- (16) 「うつり香」発表時の「東京日日新聞」(大4・6・7)の十束浪人名の批評は、「短いものであるが、自分の買ひ馴染んでゐる女を友人が買ったので、若しか女を友人に取られはしないかといふ苦悶がよく描出されてゐる。」といった紹介記事の域を出ていないが、これは秋江が「舞鶴心中」(「中央公論」大4・1)を中心とする「心中物」の世界で問題作を発表しつつあった時期であったことを考えると、当然のことであつたのかもしれない。しかし「別れたる妻」物の系列に「うつり香」を置いてみると、やはり重要な意味——問題性を持つ作品であつたと言ふことができる。
- (17) 『蘭燈情話』への収録に際しての冒頭部分の削除と、題名及び主要人物の姓名の変更は、「うつり香」を「別れたる妻」に送る手紙」の続篇としてではなく、一個の独立した作品として扱おうとしたためであろう。一連の「手紙」による妻ますへの訴えは、すべての事情が明らかになつたこの時期、意味を失つてきている。あえて続篇とする必要はなかつたのである。

尚、「うつり香」は『蘭燈情話』の目次では「情火」となっている。

この「情火」を含め原題の「閨怨」及び「うつり香」は、それぞれ〈性〉に関わる表現であり、作者秋江も充分意識していたと思われる。それは作中の描述からも窺われ、「うつり香」論の重要な問題の一つとして考えられるのだが、紙数の都合から別の機会に譲ることにした。

△付記▽

この小論は、「近松秋江私論（九）」（『文学年誌』90・12）の続篇に当る。

（一九九一年十月稿）